



発行：ヒッポファミリークラブ広報室
TEL:03-5467-7041
MAIL: kouhou@lexhippo.gr.jp

ヒッポファミリークラブ News Letter 2020 vol. 1

多言語教育を提唱するヒッポファミリークラブから、
多言語の習得や関連する研究、グローバル人材が育つ環境など、さまざまなトピックをお届けします！

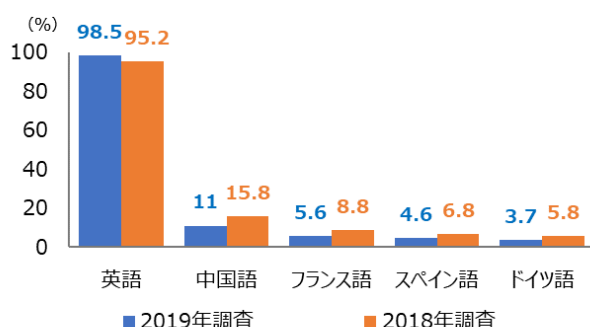
- 五輪をチャンスに。ひらけ！多様なことばの世界
- 小学校外国語教育では「原則英語」よりむしろ多言語を
奈良教育大学教授 吉村 雅仁（言語意識教育、国際理解教育）
- 子育て・仕事にまっしぐら！「多言語育ち」ママの成長ストーリー
- インフォメーション（第7回多言語プレゼンテーション大会 ほか）

五輪をチャンスに。ひらけ！多様なことばの世界

2020年東京五輪・パラリンピックの開幕まで約半年、世界中から訪れる人々を迎える準備が急がれています。そのなかでも言語の環境整備には目覚ましいものがあり、首都圏を走る電車では遅延やトラブルなどの情報をリアルタイムに知らせる英語アナウンスが聞かれるようになり、公共の場での多言語対応も定着してきました。

急速に進化する言語のインフラに対し、なかなか進まないのが私たち自身の意識の変化。ヒッポファミリークラブが全国に行った調査では、高校生以下の子どもを持つ親御さんの98.5%が英語を学ばせることに興味があると答えました。中国語やフランス語など他の言語と大きく差をつけ、英語学習熱はよりいっそう高まりを見せています。

子どもに習わせたい言語（上位5つ）



子どもの語学教育に興味がある理由（上位5つ）

外国語を日常会話ができるくらい話せるようにさせたいから	60.8%
簡単なあいさつや自己紹介ができるようにさせたいから	31.7%
勉強ができるようにさせたいから（進学・成績のため）	26.2%
子どもをグローバルな人材に育てたいから	26.2%
外国人とコミュニケーションを取ってほしいから	24.3%

調査期間：2019年10月18日（金）～21日（月）

調査方法：インターネットリサーチ

調査対象：高校生以下の子どもを持つ20～59歳の父母1,000人

※子どもの語学教育に興味・関心があること

モニター提供：株式会社 クロス・マーケティング

* どちらの質問も複数回答可

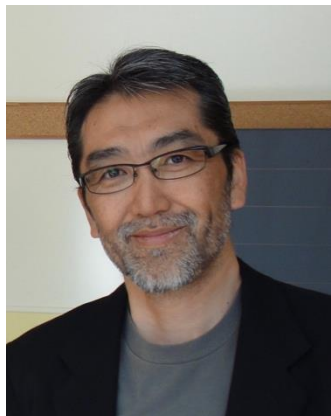
子どもの語学教育に興味がある理由は、およそ4人に1人が「子どもをグローバルな人材に育てたいから」「外国人とコミュニケーションを取ってほしいから」と回答。学習対象としての英語に意識が集中するいっぽうで、語学を通じて言語の習得だけでなく内面の成長も期待していることがうかがえます。

外国人観光客や日本で暮らす外国人の数が過去最高を更新し続け、すぐ隣に外国人がいる光景が日常化する今の日本。聞こえてくる言語の多様性を誰もが肌身で感じつつも、英語へのこだわりから解放されない日々は続きます。真の国際化が試される東京五輪を転機に、私たちの言語意識はどう進化していくべきなのでしょう。自分は外国語ができないと気後れせず、相手は日本語がわからないと決めつけず。思い込みをなくしその多様性を受け止めた瞬間から、ことばの世界がさらに開かれていくのではないかと私たちは考えています。

学校の外国語教育に多様な言語を取り入れることの意義について、言語意識教育の専門家にうかがいました。

小学校外国語教育では「原則英語」よりむしろ多言語を

奈良教育大学教授 吉村 雅仁（言語意識教育、国際理解教育）



奈良教育大学教職開発講座（教職大学院）教授。専門は、言語意識教育、国際理解教育。主な研究テーマは、小学校における複言語教育とその実践のための教員養成、教材開発。主な共著書に、“Educating English Language Teachers to Critical Language Awareness: A Collaborative Franco-Japanese Project” (López-Gopar, M. (ed.) International Perspectives on Critical Pedagogies in ELT. Springer Nature, 2018)、「小学校における多言語活動の可能性」（平高史也・木村護郎・クリストフ（編）『多言語主義社会に向けて』くろしお出版2017）、「小学校における国際理解教育としての外国語活動の可能性」（西山教行・大木充（編著）『世界と日本の小学校の英語教育：早期外国語教育は必要か』明石書店2015）など。

東京オリンピック・パラリンピック開催年を迎えた今年最初の国会で、首相の施政方針演説が行われた。「地方創生」「観光立国」に関しては「外国人観光客2030年6000万人目標」を目指すという。さらに観光立国の基盤づくりとして「多言語化」も盛り込まれた。既に在留外国人や観光客は増え続けているが、五輪を契機に日本が言語的にも文化的にもこれからさらに多様な時代になることが予想される。この社会状況をふまえると、外国語教育も多言語化すべきと考えるのが自然である。

しかし、学校の外国語教育の現実にはほぼ英語に偏っている。外国語といいながら、検定教科書は英語しか存在しない。教員養成・研修も英語以外の言語を扱うものはほぼない。特に小学校では、外国語教育の免許もなく、訓練も受けていない圧倒的多数の教員も外国語を担当することになるため、教科書も研修もない言語の教育など想像すらできないであろう。

このような状況下で、英語以外にも多様な言語を取り入れた実践を行う珍しい学校がある。奈良市内の公立小学校である。例えば、外国につながる児童が学校にいれば、その家族を学校に招き、彼らの言語や文化を学習の対象とする。また、学校のまわりに観光名所があるので、児童は外国人観光客を探し、彼らの背景言語を調べる。当然アジアをはじめ多様な地域の言語に気づく。続けて児童は自分のお気に入りの言語の一つを選び、「わたしの夢」と題したスピーチ原稿をその言語で作る。原稿は機械翻訳が中心なので間違いだらけである。原稿を持って再び観光地へ行き、その言語話者を探し出し、自分が書いた原稿を読んで、発音や文法の誤りを修正してもらう。児童と観光客とのやり取りは、日本語、英語、児童の選んだ言語が入り交じる。最後に、自分の選んだ言語で「わたしの夢」のスピーチコンテストである。各自スピーチの前に、自分が選んだ言語について特長を説明する。選択言語数は毎年10言語はくだらない。アジアの言語群が多い一方で、トルコ語、ギリシャ語、フィンランド語、ウクライナ語など一般にほとんど知られない言語も含まれる。

外国語教育政策の本流からそれるようなこの多言語の取り組みは、少なくとも二つの意義を持つ。一つは、児童が、身の回りの多様な言語状況の現実を知り、それらに対する興味、感受性、寛容性を高めていることである。自分の持つ言語レパートリーを総動員してコミュニケーションを図ろうとする経験がそれを可能にすると考えられる。もう一つは、いわゆるメタ言語能力が育成されることである。彼らは、機械翻訳、母語話者とのやり取り、そして多言語での発表会で、三つ以上の言語の比較を行うことになる。その過程で、言語そのものの特長、言語間の共通性や相違性について意識し、言語の学び方を学んでいると思われる。

現在学校における外国語教育は、英語一つをできるだけ早く始め少しでも長く学ぶことで、全員が英語を身につけられることを目指している。しかし、言語環境、教員、学校での授業時数等を考えれば、多様な言語への興味関心やメタ言語能力を高める方が、各個人のその後の言語学習にとってむしろ効率的なのではないだろうか。

子育て・仕事にまっしぐら！「多言語育ち」ママの成長ストーリー

生まれて間もない頃からヒッポファミリークラブに参加し多言語に囲まれて育った若者たち。今回はそんな「多言語育ち」ともいえる若い世代の会員から、小学校教師として働く子育て中のママを紹介します。

岐阜県各務原市に住む佐藤穂奈さん（28歳）は36歳のご主人と2歳8か月になる息子さんの3人家族。現在は育児休業中で4月から以前勤務していた小学校に復職予定です。1歳から両親と共にヒッポファミリークラブに参加し、今では息子さんも交えた3世代で多言語活動を楽しんでいます。

物心がついた時には多言語が飛び交う環境にいたという佐藤さん。両親は特にホームステイの受け入れに積極的で、10カ国以上の外国人を自宅に迎えました。幼かったため本人は覚えていないものの、ゲストと仲良くなりすぎて別れる時に泣いて困ったという話を後で聞いたそうです。彼らと一緒に写った多くの写真が当時を物語ります。

その他にも、单身や家族で赴いた海外の家庭でのホームステイ、高校2年で挑戦したドイツへの1年留学といった数々の経験は、教師の立場となり外国籍の児童と向き合うことが増えた現在にも生かされています。



1泊2日でホームステイに来たマレーシア人の企業研修生と大の仲良しに。3歳3か月の時、岐阜県可児市の実家で撮影

ことばを介さなくても人は分かりあえる

近隣に工場が多い土地柄、佐藤さんが勤務する小学校には約500人いる児童の中にブラジル、フィリピンなどの外国人家族の子どもが30～40人ほど在籍しています。学校にはポルトガル語とタガログ語の通訳がいますが、例えば児童との2者面談の際には教師は主に通訳と話す状況になり、当事者である本人とのコミュニケーションが希薄になりがちだそうです。そんな時に佐藤さんが心がけるのは、彼らの話を最初からわからないと決めつけず、その児童のことを知りたいと思っていることがきちんと伝わるように、相手の目を見て話すこと。幼い頃からの多言語活動や海外体験で培われた「ことばを介さなくても人は分かりあえる」という信念がその行動を支えています。

教師として働き始めて5か月目の夏休み明け、日本語がまったく話せないブラジル人の児童（Y君）がクラスに編入してきました。数日後、日本語でやりとりができないにもかかわらず、ある日本人の男子児童が佐藤さんにY君のことを詳しく教えてくれました。共通の言語がなくても二人の間に意思の疎通が生まれていることを目の当たりにし、相手を知りたいという気持ちと相手に何かを伝えたいという熱意をきちんと態度で示すことの大切さをあらためて実感した出来事でした。

運動神経が良くサッカーが得意だったY君はその後すぐにクラスの人気者に。転校してしまったため残念ながら卒業を見届けることはできませんでしたが、彼のことは今でもよく思い出そうです。

目指すのは誰もが「自分と同じ」と思える学級作り



インタビューに応じる佐藤さん
4月から新生活スタートに向け
「時短料理」や「ついで家事」も修得中

佐藤さんには今でも鮮明に思い出すドイツの高校留学時代のエピソードがあります。大学で声楽を専攻するほどの音楽好きだったため、週に1回行われる選択制の特別授業では音楽を選びました。得意の音楽でしたが、初めての授業はドイツ語で行われた楽典の講義。何もできずにただ90分が過ぎていったそうです。授業が終わった後、遠くに座っていた数名のドイツ人学生が近寄ってきて、講義の内容を書き留めたノートを差し出してくれました。彼らがそっと自分を見てくれた気持ちがとても嬉しく、気遣いから出るささやかな行為がプラスの気持ちを生むことを実感したと言います。孤独、不安、疲労感。彼女はいま「ことばがわからない世界にいる子どもの気持ちが理解できる」と感じています。

新学期から再び小学校で教壇に立つ佐藤さん。これからも増えていく外国籍の児童にどう向き合うかを聞いたところ、「日本の子ども達が外国人も自分と同じと思えるような学級作り」という答えが返ってきました。外国人だからといって特別扱いをせず、困っている人は誰でも助ける、ということを自らの態度で示すことを心がけていきたいと言います。立ちちはだかる「ことばの壁」も、「日本語ができないならできないなり」のアプローチで乗り越える」と職場復帰にかける決意を語ってくれました。

来る3月1日、佐藤さんはヒッポファミリークラブ主催の多言語プレゼンテーション大会に出場します。「わかりあいたい」というテーマで、日本語・英語・ドイツ語・スペイン語を使い2,000人の聴衆に自らの思いを伝えます。大会初のマムプレゼンターとしても注目が集まります。

インフォメーション

多言語教育やグローバル人材を育む環境への理解を深めていただくため、さまざまなイベントを開催しています。

「ことばの体験」を生かし3つ以上の言語で社会へメッセージを発信 第7回多言語プレゼンテーション大会



日時：3月1日（日）10：00～16：00（開場9：30）

場所：LINE CUBE SHIBUYA／渋谷公会堂（渋谷区宇田川町1-1）

ヒッポファミリークラブの活動に参加して育った若者達が自らの多言語体験を世の中に伝える場として始まった多言語プレゼンテーション大会。過去6回の歴史を重ね、これまでに登壇した若者達はのべ約200人にのぼります。日本に留学中の外国人学生なども参加し、会員以外にも開かれたものになりました。またイベントの企画運営は、開催当初から現在まで、大学生を中心とした有志による実行委員会が担っています。

7回目の開催となる今回は動画投稿による予選審査を経て、インドネシア・メキシコ・韓国・ベトナムからの留学生を含む17歳から29歳の若者18人の出場が決定。子育て中のママプレゼンターも初登場します。また大会前日には動画予選で出場に至らなかった応募者の中で再び選考が行われ、追加の出場者が選出されます。

約2,000人を前に行う多言語プレゼンテーションでは、外国語が話せるだけでなく、自らの体験を自らのことばで魅力的に語る能力が求められます。若者達のみずみずしい感性から生み出される力強いことばと体全体から発せられるエネルギーは、集まった人々に大きな感動を与えます。

特別講座「ことばと人間を自然科学する」

日時：3月20日（金・祝）10：30～16：00

場所：すみだリバーサイドホール

（墨田区吾妻橋1-23-20）

定員：700人（完全入れ替え制）

■第1部 対談 10：30～12：30

中村桂子 JT生命誌研究館 館長

酒井邦嘉 東京大学大学院総合文化研究科 教授

■第2部 講演 14：00～16：00

木村護郎クリストフ 上智大学外国語学部 教授

毎年好評を得ている、ヒッポファミリークラブの会員以外も聴講可能なオープン講座を今年も開催します。生命科学、言語脳科学、言語社会学という異なる分野の専門家から話を聞き、「ことばとは何か？」「人間とは何か？」について共に考えます。春休み中のお子さまはもちろん、赤ちゃん連れでの参加も可能な、家族全員で楽しめる講座です。

ことばや世代を越えて新しい仲間と出会う 国際交流キャンプ 第7回 多言語・雪の学校

日程：3月27日（金）～3月30日（月） 3泊4日

場所：長野県飯山市なべくら高原・森の家（飯山市照岡 1571-15） 他

自然体験と共同生活を通して友情を育む恒例の国際交流キャンプ。小学3年生からシニアまで、海外や日本各地から幅広い年代の参加者が集まります。学校や仕事、日常生活では出会えないさまざまな仲間達と、文化やことば、世代を越えて交流します。今年は日本に滞在中の留学生やインドネシアの子どもたちを含む、過去最多となる700人を超える参加者を予定しています。



上記のイベントは当日のご見学やご取材も可能です。ご希望の際は下記担当までお知らせください

ヒッポファミリークラブ 広報室 TEL:03-5467-7041（代表電話のため受付は平日9：00～17：30となります。あらかじめご了承ください）

FAX:03-5467-7040 MAIL:kouhou@lexhippo.gr.jp